

## 「研究優先」か？ 「教育優先」か？

金木 亮一

生物資源管理学科

大学教員の主な仕事は研究と教育。そのどちらを優先させたらよいのか、常に悩んできた。「大学教員は自分の研究で解明した最先端の知識を学生に教授すべきであり、その為には研究をしっかりとやらなければならない」という“研究優先派”、「公立大学の使命は地域の産業、文化の発展に貢献する人材の育成であり、その為にはしっかりとした教育が大切である」という“教育優先派”、私は両者の主張とも、もっともだと思う。そしてその狭間で揺れ動いてきた。「研究と教育は大学教員の当然の責務であり、両方とも立派にこなすべきである」という方は、以下の文章をパスして下さい。

### <教育優先？>

私は大学卒業後すぐに滋賀県立短期大学の助手として採用され、その後25年間を短大教員として勤務し、120名の学生に卒業論文を、4名の学生に研究生論文を書かせてきた。さらに17年を県大教員として過ごし、54名の専攻生に卒業論文を、8名に修士論文を、1名に博士論文を書かせるべく手伝いをしてきた。この間、学生と共に学び、遊び、非常に充実した日々を送ることができた。先日、卒業生が中心になって、私の退職記念パーティを開催してくれたが、そこには多くの短大・県大卒業生が集ってくれて、当時の思い出話をして、存分に楽しむことができた。短大・県大の学生の卒論等は、私の宝として全て保管してきたが、これを機会にOB、OGに返却したところ、大層喜んでもらった。“教員”としてではなく、“共同研究者”として「学生と一緒に研究をしてきたな」という思いが込み上げてきた瞬間である。私の好きな座右の銘の1つに「教えるとはともに希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」という言葉があるが、文字通り、ともに希望を語ってきたという思いで、大満足であった。

### <研究優先？>

県大に移籍すると、研究重視のきつい風に吹かれて、研究優先側によるけた感がある。しかし、そのおかげで、17年間に35報の査読付き論

文を発表することができた。年2.1報のペースであり、短大時の0.5報/年の4倍という量産ぶりである。そして、望外にも2002年、「農地からの流出負荷削減に関する一連の研究」に対して農業土木学会学術賞を戴いた。公立大学教員としては初の受賞という名誉まで付いて。

かといって、教育を手抜きした覚えはない。それでも研究優先と感じる原因はどこにあるのだろうか？

年のせいで学生と一緒にスポーツなどをして遊ぶことが少なくなり、相対的に研究時間が増えたためであろうか？ 今もって謎である。

### <研究を活性化させる？>

「県大の先生はぬるま湯に浸かっている」ということをよく聞く。私も「ぬるま湯大好き派」なので大きなことは言えないが、世間の風は強く冷たくなりつつある。「ぬるま湯」から抜け出すのはなかなか大変だが、「赤信号みんなで渡れば怖くない」の例えのように、みんなで抜け出せばどうだろうか？ 私は2年ほど前から、学科の同僚4人と月1回のペースで「教員同士の勉強会」とそれに続くB.Y.O.(Bring Your Own)を行っている。各々、年1報、学術誌に投稿することを目標に、論文の雛型を持ち寄って、喧々諤々議論を行い、終了後はお酒を交えてなごやかに歓談する。おかげで創作意欲減退気味のお爺さんでも、原稿締め切りに追われるエキサイティングな日々を送ることができた。異分野の人とディスカッションすること、忌憚のない批評を受けることは、とても貴重で楽しいことと実感した。



写真1 生物資源管理学科一期生の卒業記念写真

県大の諸先生方もぜひ意図的にグループを作って、「ぬるま湯からの脱出の旅」に出かけられることをお勧めしたい。

### <学生の自主性を高める？>

講義をしていて、最近、学生の自主性の低下がとみに著しいのに驚く。私は2年に1度くらいの割合でテストに「自問自答」問題を出してきた。まず、ある公式を書かせる。これは「暗記しろ」と言うので、ほぼ全員が解答できる。ところが、「その公式を使う問題を作成し、その問題を解け」というと、ほとんどが白紙である。開学当初は「自問自答」問題はカモ扱いで、学生はこの問題で点数を稼いでいた。しかし、「自問自答」する割合は年々減少の一途をたどり、今年はずいに、問題に着手したのが2割に留まるという惨憺たる有様であった。完全に「指示待ち族」化してしまっている。学生の「品質保証」をするために教員が懇切丁寧な授業をしているため、「どっぴりとぬるま湯に浸かってしまった」のであろうか？ どうすれば自主性が向上するような授業が開発できるのか、私には対策が見いだせないままである。後に残る先生方の改革に期待したい。

一方、先日、「教育をタダにする」という連載記事が朝日新聞に載っていた。アメリカでは無料オンライン講座がはやっていくという。ウェブサイトでは大学の講義が公開されており、世界中の人が無料で受講することが出来る。「エデックス (edX)」は「ハーバード大、MIT、UCバークリーなど12大学24講座を公開、受講生は70万人超」、「コースラ (Coursera)」は「コロンビア大、プリンストン大、東京大など62大学325講座を公開、受講生は285万人」、「ユダシティ (Udacity)」は「授業力で選ばれた教員や著名人ら約20人が20講座を公開、受講生は100万人超」。日本でも「東京大、京都大、早稲田大などが2005年に教材を無料公開する団体を作り、いま23大学が計3000科目の教材を公開」しているとのこと。

オンライン講座に対する大学の生き残り対策として「反転授業」なるものも紹介している。「オンライン動画を使い、従来は教室で受けていた講義を自宅で学び、自宅でしていた練習問題を教室で解き、教員は教室内を巡回して学生の疑問に答える」という手法で、米国で急速に広がっているとか。教員いわく、「私

の役割は学生一人一人の理解度をきちんと把握して助言し、学費分の学習効果を得てもらうこと」。エデックスの学長いわく、「数百年の間、教員は教壇からの講義を続けてきたが、オンライン講座をうまく利用すれば、大学教育をより効果的なものにできる」。……さて、世界のこんな動きにどう対応していくのか、少子化に伴う受験生減少対策とも併せて、大学の生き残り合戦が正念場を迎えることでしょうか。先生方の冷静で的確な舵取りに期待したいと思います。

### <定年退職後は？>

昨年秋から、自宅近くに猫の額ほどの農地を借りて、「晴耕雨読生活」の準備をしている。定年退職記念講義の後の祝賀会において、ミニの耕運機をプレゼントして戴いたので、チョット欲を出して、畑作物の生育実験をしてみるつもりでいる。しかし、「口に入る野菜の量を如何に増やすか？」程度の実験位しか出来ないだろうから、とても「研究を続ける」とは言い難い。やはり、教育中心にならざるを得ないだろう。今のところ、夢の段階ではあるが、経済的に困っている中学生や高校生を対象に、「無料寺子屋塾」なるものを運営したいと思っている。場所は、自宅近くの自治会館が無料で貸してくれるとのことで、確保できた。しかし、運営のノウハウが全くないので、地元の市教育委員会に問い合わせしてみたところ、「そんなものは扱っていない」とけんもほろろの対応、立命館大学の学生を中心とした学習支援ボランティア団体が津市や守山市などで活動しているが、それらを参考にしつつ、ゆっくりと船出をしようと思っているところ。どなたか情報をお持ちの方は、連絡戴ければ幸いです。これにて、筆を置くこととします。



写真2 生物資源管理学科十五期生の卒業記念写真